

樹種名	アベマキ (別名:コルククヌギ、ワタクヌギ)	
科 目	ブナ科	
学 名	<i>Quercus variabilis</i>	
分 布	関東地方から四国・九州の山地に自生し、西日本では雑木林に普通にみられ、国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布する。	
樹木特性	陽樹であり、落葉性の高木で、クヌギに似ているが、樹皮に厚いコルク層が形成される点と葉の裏面に毛があり灰白色となる点で区別できる。雌雄同株。葉の展開と同時に開花する。	
用 途	薪炭材、シイタケの原木など。 樹皮はコルク層が発達し、深い割れ目ができ、コルクをとるために栽培されていたこともある。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	2 本 / 0.0007ha (3,000 本 / ha)	
特 徴	【樹 形】 高さは 15 m、直径 40cm ほどになる。 枝ははじめ白色の軟毛が密生するが、のちに無毛となり、2 年枝は白っぽいまら皮目が散生する。 葉は互生し、長さ 12~17cm、幅 4~7cm の卵状狭楕円形。先端はとがり、基部はまるい。長さ 1.5~3.5cm の葉柄。側脈は 12~16 対。浅い波状の鋸歯の先端は長さ 2~3mm となる。葉の表面は、若葉では毛があるが後に無毛となり、光沢がある。裏面は星状毛が密生しており、灰白色であり、風の強い日にはあおられると裏面の白さが目立つため、白さでアベマキの存在が簡単にわかる。 開花は葉の展開と同時であり、雄花序は長さ約 10cm、新枝の下部から垂れ下がる。花序には軟毛がある。雄花の花被は直径約 2.5mm。雄しべは 3~4 個。雌花は新枝の上部の葉腋にふつう 1 個ずつ付く。雌花には長さ約 1mm の柄があり、柱頭は 3 裂。果実は堅果。直径 1.8cm ほどの球形。翌年の秋に成熟する。殻斗には線形の鱗片がらせん状にびっしりとつく。 果期は 9~10 月頃で、堅果（ドングリ）が殻斗に包まれており、クヌギの堅果とよく似ているが、クヌギよりは殻斗は浅く、楕円形のものが多い。	
試験地での様子	ポット苗を 2 本植栽した。 植栽から 18 年が経過し、平均樹高も約 8.5m 程度まで順調に成長している。	
被 害	野兎・鹿の被害は特に無かった。	

【現存率】

2本を植栽して現存している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は100.0%であった。

【根元・胸高直径】

植栽後、18年を経過した平均胸高直径は、8.20 cmであり、順調に成長している。

【樹 高】

植栽後、18年を経過した平均樹高は、8.44m であり、順調に成長している。



《プチ情報》

アベマキは、樹皮がコルク層の発達によってあばた状になる様子を意味して“あばた”に見立て「あばたまき」の意味で、それが転訛して「アベマキ」となるとされる。

樹皮を拡大してみると、年輪のようにコルク層が形成されていることがわかる。コルク層が厚いために薪、木炭、椎茸のホダギとしてはクヌギに劣ると言われ、ワインの栓などに使用するコルクは、地中海沿岸に生育するコルクカシから採取したものであるが、アベマキのコルク層はそれほど発達しない。第二次世界大戦中から戦後しばらくの間は、一度砕いて糊で固めた粉コルクとして多く使用された。

アベマキのドングリは、1年目にはほとんど大きくならないが、2年目には急激に大きくなり、9月の終わり頃には落ち始める。わざとスローペースでドングリを成長させるのではないかと考えられている。

